「先生だって」を考察する

私は昨年の「ゆずり葉」で『教師を子どもの社会的立場と同等に引き下げることは正常な教育活動を阻害する』と書きました。

化粧をしている中学生を指導するには女性教師がすっぴんでなければいけないとは思いません。働く女性が相応の化粧をしていけないはずがありません。しかし，そのことを取り上げて「先生だって」という論理をかざす生徒がいます。最近は保護者にまで子どもに同調して「先生だって」と批判する場合があります。つまり，教師は生徒と同じでなければならないという論理です。

もちろん，子どもの前で煙草を吸いながら喫煙の害を説くのは説得力がありません。ピアスをした教師がピアスをとらせる指導をすることにも疑問を感じるでしょう。教師は生徒に「範を示す」べき立場にあることは十分承知しています。しかし，教師がすべて生徒と同じでなければ指導ができないというものではありません。そこには，指導する者とされる者，人生の大先輩とこれから社会の価値観を築こうとする者としての立場のちがいがあるはずなのです。保護者もいっしょになって教師を生徒と同等にしてしまうことは消極的な教育しかできない教師を育てることになってしまいます。

乱暴な言い方で申し訳ありませんが，「先生(親)とおまえたちを同じにして物を言うな！」という断固としたご家庭の教育的支援をお願いします。